
剣と魔法のファンタジーも十数種類の素粒子と四つの力と十一次元で構成されてる

五十嵐 ゆう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣と魔法のファンタジーも十数種類の素粒子と四つの力と十一次元で構成されている

【Zコード】

Z1883Z

【作者名】

五十嵐 ゆう

【あらすじ】

少年はある日、白い空間に居た。そこで出会った我慢な神様。神様のひまつぶしに剣と魔法のファンタジーの世界にGOする事に武器は神様のくれた一方さんの能力のみ

序章（前書き）

禁書を知らない人は、ベクトルについての説明を見てください

ベクトル：向きを持つ力の大きさ、

逆に向きのない、大きさだけの物はスカラーと呼ぶ

向きがある力は何でもベクトルです、運動量、熱の運動、電気の流れ、速度、加速度

以上、ベクトル講座

序章

少年は気が付いたら見知らぬ白い場所に居た
「あ？」

驚愕の余り、威嚇の様な声が出た。決して何かを威嚇してる訳ではない

「何がどうしたの？」

「『JR』って何回言った？」「と言った

虚しくなり、出口が何かを探そうとした直後

「六回じゃな？」

後ろからそんな声が聞こえてきた

自分以外に人は見当たらなかつた筈だが、と振り向くと

「ここは何処ですか？」

と呼ぶ
る

「ふむ、さつきの回答が正答か否か聞いてないが……まあ、どうでもいい」
「…………まあ、次元の狭間とでも言つておひづれ」

その言い方が引っかかり、少年はまた質問する

「次元の狭間とでも、という事は本当なんですか？」

「べつに間違ってる訳ではない、ただ正確に説明する事は無理なん
じゃ

日本語の語彙に無いからの」

日本語の語彙に無い、どういう事がピンと来ないだろうが
例えば、日本語の「勿体ない」という言葉は外国語には存在しない
外国には「勿体ない」という概念がないからである

「そうですか……それで、私は何故此処に居るんですか？」
少年はまた質問する

「わしが呼んだからじゃな」

老人は即答する

「何故呼んだのですか？」
また質問をする

老人は、少し考えて、言った

「…………なんとなく？」

「…………」

少年は少し沈黙したあと、老人に急接近して
腹パンチする

「おーりあー！」

しかし、普通に防御される

「いきなり何をする？一応、己の生に飽きと諦観を覚えた者を選んだつもりだが……」

老人は歌うように主張する

少年は老人を睨みつけながら怒鳴る

「勝手に人の人生を勘定してんじゃねえぞコト！その通りでは有るけどな！！」

「ど、言うわけで、お主には異世界に行つてもうりつ

老人は、サラつと言つ

「なんでだよ！――」

少年は絶叫する

「暇だからじや」

老人は例によつて即答する

少年が何かを言う前に老人が、じゃが、と続ける

「願い事を3つ、殆どなんでも叶えてやる。

例外はあるが、ほぼ全ての願いを叶えてやれる」

少年は、少し考える

そして

「じゃあ死ね」

「無理じゃ、わしに死の概念はない。頑張ればいけるが、恐らく即座に復活するぞ？」

少年は本気で舌打ちして

「じゃあチート能力でも願おうかな、一方通行くらいしか思い浮か

ばない

……それでいいや」

「粒子加速器？いや、禁書の方か？」

「禁書の方です」

少年は即答する

「ベクトル変換と天使化、AIM拡散力場とかないが、黒翼もか？」

老人はやけに詳しく聞いてくる

お前も禁書厨か？とか思いつつ、少年は答える

「黒翼は……一応付けてください、あと演算能力も」

老人はどこから取り出したか、魔法少女モノのステッキ（明らかにプラスチック）を振りながら

「チンカラホイ！今の動作に意味はない。で、二つ目の願いは？」

少年は口を抑えながら言つ

「おえっ、吐き気がする。ビニール袋くれ」

「それが二つ目か？ほれ」

老人が手を開くと、ビニール袋が出てくる

「…………」

「三つ目は？」

アクセラレータ

少年はうーん、と考えて
「願い事を無限に増やせ」

「じゃあ今ここで無限に願いを言い続ける」

「…………」

老人はドヤ顔を浮かべる

「…………」

「無限の中の一つ田だ、これで願いは終わりにして」

老人は明らかに落胆し、そしてニヤリと笑つて言つた
「人間つて面白」

とうあえず無視して言つ

「質問いいか?」

老人は答える

「どうぞ?」

「帰つて来れるか?」

「帰つてこようと思えば帰つて来れる、だが帰つてこようと思わない奴を選んだつもりじゃ」

少年は、少し落ち込んだ

「それは事実だが……。まあいい、次の質問、お前は何だ?」

「わし？お前はどひ予想する？」

「…………神？」

「じゃあわしは神じゃ、お前がそいつのならそれが正解じゃ」

少年は、少し黙り込んだ、そして
「…………本当は？」

「別に神という解釈も間違いじゃあない、お前が神と思つなら神だ
し、仏だと思つなら仏じゃ」

「じゃあお前は肩野郎だ」

「そりか」

老人は少し笑った

「取り敢えず、お前には十一歳の女の子になつて、剣と魔法のファンタジーの世界へ行つてもらひ」

「なんで……？」

「なんとなくじゃ……」

少年は思いつきり地面を踏みつけ、そのベクトルを変換し老人に
ぶつける
しかし、老人は全く動じない

「言語中枢を書き換えて、向こうの言葉を分かるようにした。

とこう訳で『F o v g g M s p H r a N E Y N V r X y g』『眠

れ、少年》』」

老人は、恐らく天上の言語とかそんな感じの言葉で短い言葉を紡ぐ
勿論、少年には意味は理解出来ない

少年は意識が薄れていく

序章（後書き）

続く

衝撃力（前書き）

$$F = m a$$

衝擊力

「おい！大丈夫か！？」

少年に向かつて、聞いたことがない言語で声がする
しかし、意味は認識出来た

「…………はつ！」

少年は、思いつきり起き上がった

「…………こには？」

その時、少年は異常に気付いた。声が物凄い高いのだ、心当たりはある

『今からお前には十一歳の女の子になつて剣と魔法のファンタジーの世界に行つてもううー』

(…………あの糞ジジイ……………)

少年は、いつか殺す、と考えた所で思考を一旦止める。

そして自分に話しかけてきた人と、その周囲に意識を向ける

話しかけて来た人は、長身の男性、髪色は青……
生物学的に有り得るのか？染めてるのか？

年は二十三から二十五、三十代ではないだろう
顔はイケメンだった、滅べ

周りの風景は、殆ど石造建築の建物、下は地面と草

一六世紀の西洋みたいな感じだった、世紀は適当に書いた

少し違和感を感じて自分の格好を見てみた

全裸でした

「…………は？」

「ここまで〇・五秒

一方通行並みの演算能力を望んでおいたからであろう
めつさ頭の回転が早いぜ、ひやつはー

「おい、大丈夫なのかおま

「きやあつ！」

少年は、そんな感じの素頓狂な叫び声を上げてしまった
死にたい、少年はそう思った

石で出来た家

「いや、本当すいません」

少年は、何故か知ってる言語で謝罪した
恐らく、あの自称神様の老人の粋なはからいだりう

謝罪の理由は、叫んだ後、この青年が警察に連行されそうになつて慌てて弁明した訳です、後は分かるだろつ

「別にもう怒つてないからいいんだけれど……」

青年はカップを片手にしおり言つ

青年は、それじゃあ、と続けて

「君、名前は？ それとどうこう事情であんな事になつてたのか？」

少年は、少し考える

（別に本名を名乗る義理も意味も無いしな……）

「名前は、火野神作です。事情は……」

少し黙り込む。その理由は簡単だ、ただ状況を整理しているだけである

「ヒノジンサクね。どうした？ 言いにくい事情でもあるのか？」

青年はそう尋ねる

「……意識が無かつたから、覚えてないのですけど……
多分、寝てる間に全裸で放り出されたのだと……」

恐らく自称神様、略して じょかみつーがやつたのであらう
あこつならやつただ、と少年は考える

「……酷いな」

青年は思わず言葉を零す

少年も、それには大いに同意だ、と思ひ、口には出さないが

少年は話題を終わらせるつと
「といひで、貴方の名前は何？」

青年は答える

「ん？ 名前ね、ミハイル」

「ふうん、じゃあミーシャって呼ぶね、いいよね？ 答えは聞いてない」

少年は無邪気な笑みを浮かべながら言った

ミーシャは少し詰まりながら言った

「あ、ああ、いいけど……」

15

といひで、ミーシャが言つ

「君、今晚どひで寝る？」

「さあ？ 最悪路上でなんとかなる、といいな」

反射をすれば、大抵の危険から身を守れる、と少年は思つ

ミーシャは相当驚愕してから、数秒で落ち着かせて

「いやいや、危ないよ」

「しかし、金もないからなー……」

「じゃあ、つむじに泊まつてく？」

少年は、ふむ、と尋ねて
「いいの？」

「ここよ、部屋は無駄に有るし」

ふふ、と少年は笑つて
「じやあお葉に甘えて」

ミーシャはアヤ、と顔を背けて

「……それじゃあ、この部屋使つて」

少年は、頭に疑問符を浮かべながら囁つ

「……？なんか怒らせた？」

ミーシャは慌てて否定する

「ああ、すまん、怒つてゐわけじやあない」

「……？まあいいや」

少年は、ふだけた口調で続けて

「ちなみに四つともくなど、寝込みを襲つのはなかなかつづ

「誰があるか、そんな事！？」

衝撃力（後書き）

続く

運動量（前書き）

$$\frac{m}{a} = \frac{m}{d^2 r} = \frac{F}{}$$

運動量

「おー、一起あらー」

ニーシャは、少年を起しゃうとしている
少年の体を揺さぶるつと、触れた瞬間

バチイと手が弾かれた

これは、恐らく無意識の反射による物だが、ミーシャはそんな事知つたことではない

「魔法…………？…………お前起きてるだろ？」

沈黙が十秒程経つた後、そろそろミーシャも痺れを切らした様で
思いつきり少年を蹴った

一
二
三
四

「పురుషులు」.....

「あれは無意識にやつてゐるからね、といつて本氣で蹴つてみるとか
思いもしないし」

「無意識だったのか……」

「私の能力は、皮膚に触れた凡ゆる力を正反対に変える能力」
本質とはかけ離れているけど、それを懲々（わざわざ）説明する義理はない

「結構すごいな」

「リチュミル先生」

突然十一歳くらいの男の子が入ってきた

「誰この人？」

幼児は少年を指さしながら言った
そして、少年は冷めた目で見つつ
「人を指さすな」

とだけ言つた

ちなみに、少年は『指さすな』とかそんな怖い表現では無く『人を指さしちゃ駄目だよ』みたいな表現をしたかったのだが、
こここの言語を文字通り頭に叩き込まれて早1日、生憎そんな語彙を持ち合わせてる筈もなく

「「」「めんなさい……」

幼児は本気で恐怖してる様だった
そしてミーシャが

「そんなに指さされるの嫌だったのか？」

(………… そんなに怖かつたか俺？)

少年はちょっとへいんだ

「へいの子はへりナ、俺の教え子」

「先生をやつてるの？」

「塾の先生を暇つぶしに」

暇つぶし、て……、少年はそう思つたが言わない
塾の先生に免許はいらなかつた筈だから

「…………」こつちはヒノジンサク、全裸で放り出されてた可哀想な子だ」

「火野つて呼んでね」

少年は間髪入れずに言つた、別にどうでも良かつたが、取り敢えず
言つておいた

「よろ

ヘリナがなんか言つた氣がするが、それを置き去りに少年は言つ
「タイミング逃したんだけど、リチウミルつて貴方の苗字？」

「ああ」

「…………」

ヘリナが はなしにいれてほしそうに こつちをみてる

「……ヘリナ君……だっけ？ よろしく」

少年は誤魔化す意味合いを込めて一いつ口ちと笑つた

ヘリナは笑顔で言つた
「よろしく、ヒノ」

少年は欠伸をしながら言つた

「それじゃあ血口紹介も済んだ所で、私は寝る」

ミーシャは呆れながら言つた

「お前起きたばっかだよな？」

「チツ……」つせーな、反省してまーす

「…………腹立つなお前」

「すまんね、…………よしーりーから出てこつた後、どうしようか

……」

ヘリナは無視して言つ

「…………先生」

ミーシャも少年を無視して答える

「おう、なんだ？」

少年は無視された事を不服に思いながら、言つた

「…………スラム街に行つて襲つてきた奴から逆に金品を強奪すればいいかな……」

ミーシャは諦観を覚えつつ言つ

「……はあ……こいよ、ウチに泊まつてけば

少年は社交辞令の笑みを浮かべながら

「ありがとう、でも明日出でくな。金を手に入れる方法なら見つけたから」

「それをやつて欲しくないから言つてんだよーー!」

少年は無視をやり返しながらヘリナに尋ねる

「先生に向か聞くこと?…言つことじがあったんだよね?」

運動量（後書き）

面倒臭いので次回に続く

四つの力

ヘリナは、戸惑いを覚えつつ、聞いてみる
「どうして物は下に落ちるんですか？」

簡単だ、引力で地球と物が引き合つてゐるからだ
子供でも知つてる理論である

ただ、ここは剣と魔法の世界、科学の発達は遅れてい
天動説が流行つて、形而上学が出てきた時代の科学力である

ミーシャは、沈黙する

それはそうだ、例えば『何故 $1 + 1 = 2$ になるんですか？』と聞か
れてる様な物だ

それが世界の法則だから、としか答えようがない

普段当たり前に感じているので気にも止めないので

「引力でこの星と物が引き合つてゐるから」

少年は適当に考えもせず、質問に答えた

ヘリナが質問をする

「じゃあ、なんで星と引き合つんですか？」

「万有引力、全ての物に引力がある。質量によつて引き合つ大きさ
は変わる、

天体は質量が桁違いため、大抵が星に引き寄せられる」

「姫の星にも引力はあるんですか？」

「ああ、ただ凄い離れてるから、地上から引力を感じる事は出来ない」

少年は質問に答える

知識を垂れ流したくなるのが人間つて生き物なんですよ

ヘリナが数回質問した後、ミーシャが言った

「……別に俺がどうじつ言える物じゃないんだけどさ

「まあ私の言つた理論が正しい証拠はこの世界にはないナビヤ、筋は通つてるだろ?」

少年が言葉を遮つて言つた

ミーシャは少し考えてから、言つ

「……怒つた?」

「別に? 信じられない氣持ちは理解出来ないでもない、歴史上進んだ理論は必ず糾弾されるしな」

中性子理論や、有名な物では地動説など、歴史上では進みすぎた理論は必ず批判される

ただ、それが正しかったと証明されたら直ぐ様計算式に組み込むけどな

ミーシャは、ふうん、と言つて、詳しくは聞かなかつた

ヘリナは、あつ、と言つて

「もう帰らなきやーじゃあね、先生、ヒノ」

「おう、氣を付けてな」

「さこならへ」

「あの子は将来天才になるよ」

少年は、咳く

そして少女が突然虚空から現れる

「そうだね〜」

少年は、叫ぶ

「てめえ何故此処にー?」

「何故つて、神様に呼び出されたからだよ?」

ミーシャは驚愕で声が出ない様だ

少女は少年に言つ

「久しぶりつ レイキきゅんつ (ゝ・)ゝ

ミーシャは、ん?、と言つて

「そいつの名前はヒノじゃないのか?」

少女は、テンションを素に戻して言った

「あ、それ偽名ね、本名は西田麗機」

ミーシャは、レイキの方を見て言つた

「…………おい」

レイキは皿を逸らす

「…………」

少女は話題を終わらせようと

「自己紹介するね、私は『塩崎純菜』、レイキちゃんとは幼馴染だよ」

「残念ながらな」

レイキは、本気でため息を付きながら言った

純菜は少し沈黙してから言った

「…………傷つくな？」

「傷つけ」

レイキは即答する

純菜はため息を付き

「はあ…………本当に傷ついた。君ちよつと毒舌を増していない?」

レイキは疑問符を浮かべ

「? 別にいつもこんな感じじじゃない?」

ミーシャは、思わず

「いつもこんな感じかよ……」

と漏らした

「『まあ僕が精神的に疲れてるせいかな?』『

純菜が言葉を発する、しかし、霧囲気が変わる。『気持ち悪い』そういう形容するしかないような

レイキヒーラーは一步飛び退く

すると霧囲気は消える

純菜は、聞いてよ、と言葉を紡ぐ

「聞いてよ奥さん、神様に大嘘憑き頼んだけどさ、これ氣い抜いたら発動すんだよ、何回か世界消しかけたしあ……」

純菜は言葉を続ける

「本当、説明だけ見たら便利そつなのに、実際持つてみると不便すぎるんだよね……」

レイキは、何か微妙な顔をしながら

「お、おう、大変そうだな」

「まあ、大嘘憑きキャンセルの能力貰ったからいいよ

四つの力（後書き）

続く

大嘘憑き（前書き）

その幻想をぶち殺す！！

ベクトル操作を手にした少年『西田麗機』

私の絶命を無かつた事にした

大嘘憑きを手にした少女『塩崎純菜』

大嘘憑き

「起きて〜」

純菜は、レイキを起こそうとする
しかし、反射で触れる事が出来ない

「……反射！？……なら……」

純菜は掌に手榴弾を召喚した

そしてピンを抜き、放る

ドッカーン、という爆音が鳴り響く
しかし反射されてるのでレイキは傷一つ負わない

「！？ なんだ！？」

レイキは飛び起き、周りを見渡す

音は反射されていないので、鼓膜が思いつきり破れた

「『鼓膜の傷を無かつた事にした』。おはよつ、レイキきゅんつ
純菜は何事も無かつたかの様に、話しかける

「…………どこから手榴弾持ってきた？」

壁に突き刺さった破片と、今の台詞で全てを理解した。
一方さんの計算能力パネエっす

「勿論、私の能力だよ 神様は、願い事をみつ叶えてくれるんだ
よ？」

純菜は、当たり前の事の様に言った
純菜は続けて

「一つは大嘘憑き（オールフィクション）

一つは武器を無から出現させる能力
もう一つは……秘密つ

「…………成程な…………」

レイキは、ふうー、と息を吐いて

「この物語が、
神様の作った奇跡の通りに動いてるってんなら……」

レイキはベットから飛び降りる

「まずは

「え？え？何？」

純菜は、混乱してるが、レイキは無視して続ける

「その幻想をぶち殺す！！」

レイキは純菜の頭に触れる、その右手で

そして血液逆流を実行

純菜は生命活動を停止、死んだのだ

「It's All fiction・私の絶命を無かつた事に
した」

ネイティブな発音で純菜は言つ

「…………やつぱりな」

「いきなり血流操作は酷くない？私何か悪いことした？」

「寝てる人間に對して対人殺傷用の破片手榴弾投げつける事の何処が悪くないと？」

「いやいや、反射が効いてるからやったんだって、『僕は悪くない』」

少しの沈黙の後、レイキは、はあー、とため息をつく
「まあ、グダグダやつても仕方ない」

純菜はテンションをいつもの調子に戻して
「じゃあミハイルに飯たかりに行こ」

「「」馳走様、と」

レイキと純菜がハモる

ミーシャが言つ

「お前ら、食後にも祈るんだな」

純菜は、何を言つているんだ？、といつ顔で首を傾げる
するとレイキが、口を開く

「まあ、それが私たちの故郷の文化ですしね」

すると純菜は言つ

「そういえば聞いたことがある、キリスト教では、長つたらしい食前の祈りがあつて、食後の祈りは無いとかなんとか」

レイキは答える

「そうだね、キリスト教の人に怒られるから『長つたらしい』とか言つのはやめよしね」

純菜は、クスツ、と笑いながら

「そうだね」

「それじゃあ、お世話になりました」

ミーシャは言つ

「金とかは大丈夫なのか?」

「はい、盗賊返り討ちにして、パンツ一丁にして、警察署内にポイすれば……」

「おいやめろ」

「断る、人間は技術を手にすると使いたくなるんです。行こう純菜

純菜はポカンとしている

レイキは、頭に疑問符を浮かべ

「……?どうした?」

「レイキ君が、名前を呼んだ……」

「？　ああ、嫌だった？」

「いいよ、名前で呼んで」

レイキは、ん、と軽く一言返事して
それからリーシャの方を見て

「お世話になりました、またおめもじせの田を楽しみにしてます

「ね」

大嘘憑き（後書き）

次回予告

殺すのは抵抗があるな、これでも俺一般人だし
一方さんの能力を手にした少年「西田麗機」

君の反射を無かつた事にした

ハイテンション少女「塩崎純菜」

次回『金稼ぎ』

神に後悔は存在しない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1883z/>

剣と魔法のファンタジーも十数種類の素粒子と四つの力と十次元で構成され

2011年12月20日22時54分発行